

1918年東京麹町に生まれた堀文子は、幼少の頃から自然界の営みに興味を持ち、科学者を夢みるが、当時の女性に学者の道は厳しく、芸術の道で自立しようと、女子美術専門学校（現女子美術大学）師範科日本画部に入学する。在学中に新美術人協会第2回展に出品、初入選を果たす。戦後、創造美術、新制作協会日本画部、創画会に属し、新しい日本画を目指す革新的なグループで活動を続け、34歳で第2回上村松園賞を受賞。42歳で夫と死別し、3年に渡り、エジプト・ヨーロッパ・アメリカ・メキシコを旅する。堀文子が大磯町に転居したのは、海外放浪の旅から帰国後の1967年47歳の時だった。長い海外生活で、森の中で自然と共に生きていきたいという願いを強くもつようになった堀は、東京から遠くなく、相模湾を望み、豊かな自然に囲まれ、急行の止まらない、温泉のない、大磯の地を選んだ。日本古来の原生林が残る高麗山の麓は、山や森、古木を大切に思う堀にとって、最高の住処となった。2019年2月に没するまで50年以上を過ごし、終の住処となった大磯のアトリエでは、多くの代表作が誕生した。

大磯町での初の展覧会となる今展では、アトリエ近くの相模の海や松並木、大切に育てた庭の草花の本画やスケッチ、初公開となる下図、堀が旅先でみつけた布や雑貨、写真家の飯島幸永氏が記録した「堀文子と大磯」の写真を展示する。また、堀文子のアトリエ、「高麗ホルトノキ」の資料も紹介する。

「自分の住む神奈川県・高麗山を初めて描いて見てはっとした。太古の日本を覆っていた照葉樹林の生き残りのこの原生林には、まだ森の妖精が住んでいて、蝉の鳴く真夏の山に沢山の樹霊の顔が、私を見詰めているのが見えたのである。」（堀文子／「サライ」2007年19号より）



《日の出》(1972年) 堀文子が移住した頃に描いた大磯。



《ゆきさぎの宴》スケッチ(2004年)



《紅梅》(2016年) 絶筆作品。アトリエの庭に咲く紅梅。



《ケツァール(古代マヤの守護神)》下図(2009年)初公開  
下図とは、日本画の構図を決める大事なプロセス。大作ともなると大きさや構図を変えて繰り返し描かれる。



《妖怪と遊ぶ》(2011年) メキシコ、ペルー、ネパールで手に入れた「名もなき者」が作った織物は、作品のモチーフとなり、大磯のアトリエに大事に保管されている。

### 堀文子が守った高麗ホルトノキ



堀文子のアトリエの前にある長寿の巨木「高麗ホルトノキ」は現在、大磯町指定史跡名勝天然記念物として、町民に親しまれている。この巨木は、かつて再開発で伐採の危機にさらされたが、堀が私財を投じ守った。

大磯町郷土資料館  
Oiso Municipal Museum

〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1  
県立大磯城山公園内 tel 0463-61-4700  
<http://www.town.oiso.kanagawa.jp/oisomuseum/>



電車/JR東海道線大磯駅 徒歩約30分 バス/大磯駅～城山公園前 徒歩約5分  
車/小田原厚木道路 大磯インター約5分 西湘バイパス 大磯西インター約2分

# 堀文子と大磯

高麗山の麓のアトリエで  
生涯現役を貫いた画家

2022年1月22日(土)～2月20日(日)

開館時間 9:00-17:00 (入館は16:30まで)  
休館日 月曜日・毎月1日  
入館料 無料

大磯町郷土資料館 (企画展示室)  
Oiso Municipal Museum

主催 大磯町郷土資料館 一般財団法人 堀文子記念館  
協力 株式会社 ナカジマアート



《樹霊》(2007年)

HORI Fumiko



撮影：飯島幸永

## 堀文子が愛した大磯ゆかりの作品を集結

1967年より大磯に住み始めた堀文子。以来、大磯を拠点に、活動の場を拡げた。

### 大磯の景色と草花

森の中で自然と共に生きたいという願いで東京から転居した堀は、大磯の景色や庭に咲く四季折々の草花を繰り返しスケッチし、作品として残している。

「大磯に移り日本の自然の中で暮らし、私は命が蘇った気がしました。この風土の中から私流の日本画が生まれていくことを肌で感じ、同時に私は現代を生きる今の自分を描かなければならないと痛感しました。」  
(堀文子 / ホルトの木の下で 2007年 幻戯書房)



《松並木》(2009年) 樹の家からは、松林や相模の海が一望できた。



《どくだみ》(2007年)



《白山吹と雑草》(2014年) 晩年、庭の片隅に咲く、逞しく生きる雑草達をテーマに作品を描いた。



左《檜扇水仙》右《菖蒲》スケッチ (2012年)

## 旅の思い出 ~モチーフになった宝物~

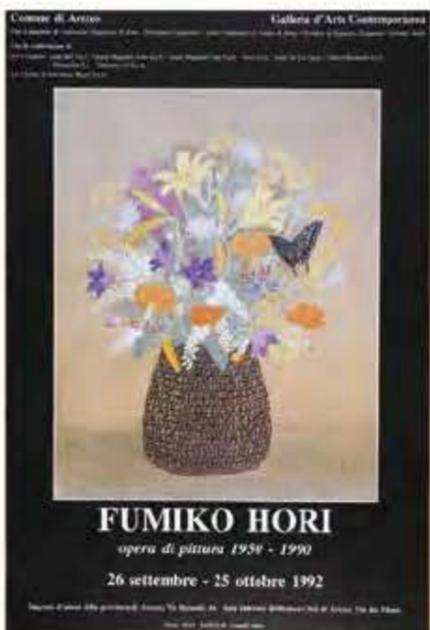
堀は、同じ生活に慣れ、感性が鈍るのを恐れ、安住を避けた生活をする生き方「一所不住」(堀の造語)の暮らしを続けた。海外取材の旅先で求めた布や小物、資料は、堀の作品のモチーフとして、度々登場している。

「自分を変えたければ住処を変えるか、せめて旅に出るのが私にとってどんな努力も及ばぬ自己改造の方法であった。新しい住処や旅先は私の中に眠る未知の因子に火を点した。」

(堀文子 / 堀文子 現在第一集 2015年 ナカジマアート)



《メキシコの民芸品より》(2011年)



1992年にイタリアで開館された「堀文子日本画展」のポスター。



《ブレインカの紋様》(2009年)



《キクラデスのヴィーナス》(2011年)

## 絵本や挿絵・装丁の仕事

若い頃より、大衆に結びつくのは印刷物だと考えた堀は、本の挿絵や装丁、絵本の仕事を多くしている。子供に本物を見せたいという想いが強かった堀の絵本は、多くの人に親しまれた。



《嵐の中の木》(1968年) 絵本『き』(谷川俊太郎詩、堀文子絵、諸井誠曲/至光社) 第16回サンケイ児童出版文化賞受賞。

## 挑戦と創造

堀は日本画の枠に捉われず、様々な技法に挑戦した。

「しぼられる必要はないのです。子供から学んだっていいのです。私は絵の自由なところに惹かれました。」  
(堀文子)



《蘇生した残り紙》(2011年) 切り絵の残り紙で制作した作品。

## 下図初公開

堀は、一枚の作品を完成するまでに下図を繰り返し描いた。「私の全て」と話していた下図は、人に見せることはなく、全てアトリエに保管されていた。下図の中には、創画会で発表した大作や、近年発表した作品、「花」の画家と称された時代の「花籠」などもある。堀が一枚の絵に込めた熱意が感じられる。



左《春》下図(1976年) 第2回春季創画展出品作の下図。切り取った猫の下図も数枚あり、ポーズや位置を決める上で使った。



左《春の月》右《秋の月》下図(1977年) 両作は、第4回創画展出品作の下図。

猫の形に切り取られた下図

## 大磯町高麗に残る 堀文子のアトリエ

晩年の制作拠点、神奈川県大磯町のアトリエは、高麗山を背に相模湾が望める高台にある。敷地にはホルトノキが守護神のようにそびえ立ち、庭には堀が好んで集めた草木が植えられ、それらを見守るようにアトリエが建っている。主のいないアトリエは、現在も堀が精力的に制作をしていたときのまま残されている。使用していた机や画材、本や雑誌も、保存されている。現在アトリエは「一般財団法人 堀文子記念館」が管理しており、一部の特別公開日を除き、非公開となっている。

今展では特別に、新しい作品を生み出すきっかけになった顕微鏡や、旅先で求めた布や小物などの「宝物」、  
「神保町」と名付けていた本棚の本などをアトリエから運び展示する。



上：堀文子のアトリエ。回転テーブルを使い、身体への負担にならないように工夫していた。  
左：描画道具。  
下：作品のモデルになった小物や籠。



左：アトリエの庭の紅梅。今回の会期中は紅梅の開花時期が重なる。

